松 岡 農 場

松岡 利治

親日度・第1位にランクしたい「マカエー」

リオから海岸を北上すること約200kmの所にマカエー市があるのを知らない人は居るまい。

マカエーにはあまり縁のなかった筆者であったが、趣味の歴史散策を兼ねた取材で何度か訪ねているうちに役所、わけても歴史博物館などでは日本移民の歴史や、同地の発展に日本人の寄与があったことが誇張されて語り継がれており、いささか面映ゆい感さえしてくる。

実際この地、マカエーに日本移民の歴史が始まったといっても過言ではない。

日本移民の中でも最も異色であろう元・鹿児島裁判所判事であった隈部三郎一家が1907年11月に郡内のサント・アントーニオ耕地に入植している。

これは笠戸丸移民を実現した水野龍の植民地建設第1号プロジェクトであったが、隈部一家の先行のみで、ついにはお流れになってしまう。

米作を試みたが、生来の農業者でもなかった隈部には期待通りの成果はあがっていない。資金も枯渇して動くにも動けなかったのであろう一家は5年余も踏みとどまっているが、その間次女照子、三女暁子などは片道8kmを徒歩で小学校へ通い、後年リオで師範を終え教員となるが、この二人がリオ州では帰化第1号であり、日系教師第1号でもある。

また隈部渡伯の折りには同行を願い出た青年が多く、その中で5人が一家と共にブラジルに渡り、内3人がマカエーに同行しているが、マカエー川を一昼夜遡航せねばならぬ地の果てのような所には居たたまれず、わずか数週間で退耕している。

この一人安田良一は1966年メジシ政権で日系大臣第1号となったファビオ・安田の父君である。

笠戸丸の丁度1ヵ月前には山県勇三郎が着伯、1911年にはマカエーのファゼンダ・カショエイロを購入し入植している。

平戸生まれの山県は北海道根室でニシン漁の荒稼ぎから海運、倉庫、鉱山、牧畜、米穀薪炭、肥料、保険、電灯、新聞・・・道随一の実業家に躍り上がった一代の風雲児であったが、差し迫った倒産を目前にブラジルに渡っている。苦闘の男隈部と好一対をなしている。

山県とて資金面で余裕のある筈はなく、無い袖を振っての農園購入であり、操業であった。安田は山県の許でも支配人として活躍しており、稲作、雑作が主であった。

この人、山県ほどエピソードに富んだ人は少ない。一つだけ紹介するなら山県一行がマカエーに乗り込んだ日の駅では「日本の大資本家来たる」というので、レオポルド・メイラ市長が楽隊を従えて出迎え、列車が到着するや歓迎のマーチが街中に鳴り響いている。

山県は例のフロックコートにシルクハット、ステッキを手に身の丈5尺8寸、23貫の巨漢の登場はそれにふさわしい押し出しであった。が家財や花火製造道具を乗せた2両の貨車代金の持ち合わせもなかったのが実情であった。とにかく破天荒なまでに豪放磊落な(タイショウ)であったらしい。

また山県は1918年に訪日した折り、昔取った杵柄の漁業をリオで興こそうと漁具を持ち帰っている。漁船6艘に漁夫20余名まで引き連れて・・・

これほど大規模な「おみやげ」があると、地元当局から水産学校設立の要望があって、カーボ・フリーオにこれを実現している。また魚肉消費の習慣が根付いていない当地で日本式漁法では魚が取れ過ぎてしまう。

魚の保存に必要なのは大量の塩であり、時を移さずサン・ペドロ・ダルデイアにはモッソロー塩田を購入するなど企業家ぶりは遺憾無く発揮されている。

1930年代の後半にはマカブー水力発電の建設が浮上してくる。「ブラ拓」が日本の共栄会と共同して落札したことは特筆に価しよう。

3000kwの発電機5基を据え付ける予定が、3基まで据えた段階で日米開戦となり、惜しくも工事半ばで会社は清算に入り、残りの工事はブラジルの管理委員会で続けられ竣工している。

この3基は「日立」製作所のモノで、「1941」年と納期が明示されてあり、60年余を経た今なお稼働を続けている。残る2基は搭載船舶が撃沈されてしまったと関係者には言い伝えられており、フランス製の同型機種が据えられている。

機械オンチの部外者には何度説明を聞いてもサッパリであるが、水門の開閉を初め各種の油圧ポンプから、何百という計器類、棟外に据えられている変電装置等々圧倒されんばかりの日本製機器が動いている。

また据付にあたっての図面から、操作上の注意など何十枚もの日本語で詳細に書き込まれた資料も保存されている。

一周20kmもあろう貯水池から一部高所を7kmほどギャラリーを通った水が、直径1.2m、厚さ1.25インチの鉄管2条で落差350m、長さ1kmに及ぶ配管を落下するという大工事であった。この鉄管もすべて日本製であるのは申すまでもない。

この一時期は日本から派遣の技師、サンパウロ「ブラ拓」本社からの要員に加えて、現地リオでの採用者多数を交えると100名を越す日本人が従事していたと思われ、さながら小日本の景観を呈していたのではないだろうか。

奇しくもこの工事の総支配人は、フルミネンセ連邦大・工学部卒の山県の次男文男であり、後年3兄弟で「ヤマガタ建設」を創立して行く。

今日の発電システムでは恐らくこれほどの落差は不要と思われるし、タービンなども水力の割りに小さく見える。

当時としては日本の最新技術で大いに貢献したであろうが、日進月歩の今日60数年経った機器を誇らしい説明を受けながら参観するのは何とも堪えがたい違和感に苛まれてならない。

貯水池周辺はピクニックや釣りにも好適な場所であり、商工会議所関係の皆様にも一度訪ねられることをお勧め、いやお願いしたい。

戦後の60年代にはマカエー市と発電所の中間にサナンヅー移住地がコチア産業組合によって造成され、一時期は40数ロッテが満植になり賑わった歴史がある。

一見したところでは地勢や肥沃度で、農業者ならホレボレする地帯であるが、雨季の洪水に毎年見舞われるのを見逃していたことから、わずか数年で全員が退散せざるをえなかった。植民とか移住地造成の難しさを実体験した歴史であろう。

発電所建設のわずかな期間と、60年代の移住地に沸いた一時を除いてマカエーは日本人、日系人のごく少ない地域であるが、日本人に寄せるマカエンセ（マカエっ子）の熱い思い、信頼はリオ州内のランキングでズバ抜けているのが肌で感じられる。

現在では講道館柔道の松田道場など37年の歴史は重く、数千の良家の子弟を育てており、市内では道場主松田四郎師範を知らない人はいない。

また近年の石油採掘ブームで、ブラジル石油公社（ペトロブラス）を始め関連企業が目白押しで、当然日

系の若手技師や経営能力、管理能力に長けた人材が多い。

定住でなく、一時就働の方も多いと思われるが、日系としてのアイデンチテイーを忘れずに頑張ってくれているらしい。

マカエーの歴史、観光案内のパンフレットに混じって一枚の日本賛歌の一文があったので、一部拙訳で紹介したい。

日の丸の国から　ブラジルへ・・
日の丸の国から　マカエーへ・・
1907年には日の丸の国から何人かの移民がやって来た
そして私たちの文化を、私たちの暮らしを、私たちの農業までも
豊かにしてくれた
（中略）
彼等はこのようにやり遂げている
農業面で協力してくれたり、また漁業でも・・
マカブーの発電所建設にも力を合わせて・・
グリセーリオの映画館や劇場にアイデアを出してくれたり
花火を打ち上げて楽しませてもくれた
友達同志になり・・
私たちの前進を愛する人となった
1907年にはすでにここが居心地の良いところであるのが
それとなく分かっていたのだろう・・
彼等はブラジルと日本の間に、いや日本とマカエーとの間に
似ている所があるのを直感的に見取っていたのだ
彼等がこれらについて何も言わないのなら　今
私たちがあえて言おう
「ようこそ　いらっしゃい、日の丸の国のあなた達が
ヒューマンで温みのあるマカエーに　ブラジルに・・」

なおこの作者アウローラ・パシェッコ女史はマカブー発電所の取締役でもある。